

1989年3月5日発行
昭和62年11月17日東京新聞創刊日 1946年11月3日

食糧自立 国際シンポジウム

「'88食糧自立を考える国際シンポジウム」

全記録

世界の農家の
声を聞く



世界の農家の声を聞く

●クラビア
五〇〇人の農民・市民が集まった
「食糧自立を考える国際シンポジウム」
●巻頭報告 1

生態系と地域文化を重視する新たな
社会を求めて 西川 潤 9

第一部 食糧の輸出入が暮らしをこわす
タイ 16

工業製品の輸出削減をぬきにした
農業保護は先進国のエゴだ
ボンヒライ・ラートウィチャー 16

アメリカ 28

マーケットローンはアメリカ農民に
利益をもたらしたか
ハーベイ・ジョー・サンナー 28

西アフリカ 36

援助や輸入でアフリカの飢餓は救えない
タイトル・テニアオ 36

タイ
農村はいかにして都市の商品文化に
まきこまれたか
アビチャート・トシユー

アメリカ
世界一の農業地帯カリフォルニアで
進む農村の荒廃
イサオ・ラジモト

台湾
五・二〇農民デモ顛末記
●何が農民を立ち上げさせたか
林 典喜

韓国
工業立国の御旗のもと農家負債は
積み重なる
金 賢丁

日本
食糧自給率の低下と農業の衰退
大野和興

第IV部 広げよう！自立のためのネットワーク

●農業と食糧を焦点に

共生への道を歩み出した農民・市民の

国際ネットワーク

古沢広祐

義兄弟アヒチャートのおきみやげ

小松光一

赤とんぼのいな、国の稲作

宇根豊

アメリカ家族農業の危機は、なぜ

●大企業と小農民の相剋の歴史から

マークリッチー／ケビン・リストウ ●武野村かつ子

しろうと混成部隊が国際シンポジウムに

こぎつけるまで

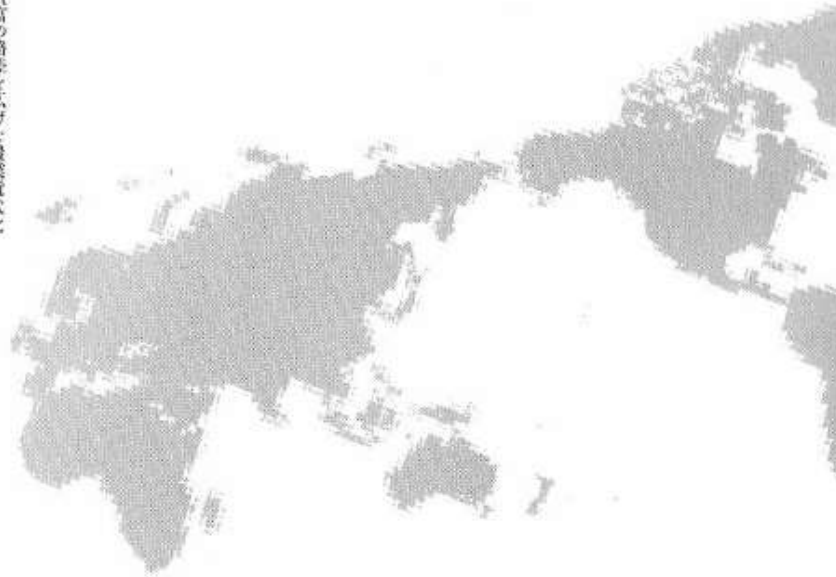
橋本明子

シンポジウム協力者一覧

参考文献ガイド／シンポジウムビデオのご案内

「アジアからのレポート」

存在しなかつた農民のための「奇跡の水」	フリードリンから	伊庭みか子	19	貧富の格差を広げた農業近代化		
政策「レーシアから」	伊庭みか子	47	ひろがる生重防除(インドネシアから)	鳥居サス子	100	森林伐採に
よる大洪水でタイの「自らの村」が死の谷に	タイから	奥州覚悟忠	105	上からの改革だったセマウル運動		
(韓国から)	小島嘉子	173				



過剰だといわれる世界の食糧。
しかし、そこでは南北間の格差、
富めるものと貧しきものの分配の問題は問われていない。
いま世界の食糧をどうみるか。
そして日本の果たすべき役割は――



生態系と地域文化を重視する 新たな社会を求めて

西川 潤

風雲急を告げる自由化の動き

最近、農産物自由化を求める一部の人々の合唱が起きている。これは一つには、先進工業諸国で農業保護が近年著しく増大していることから、OECDの場



じゅん 1936年台湾台北市生まれ
日大教授。著書『飢えの構造』(ナンド社)、『人口、食糧、貧困』(クレット)、『第三世界と平和』(早稲大)

現代農業(農山漁村文化協会)1989年3月増刊号より

1989年11月25日～27日、東京・八王子市の
大塚セミナーハウスで開催された「食糧自
立を考える国際シンポジウム」には内外の
農林・市民300名が集まった。経済二部会の
講義を前に聞き入る外国人参加者たち。



大地と交わる人類の営みとしての食糧の生産は、生命を培い、歴史と産業を基礎づけ、風土を形成し、地域環境の保全をになう原動力となってきた。

しかし、かくも進歩した科学技術をもった現在、私たち人類は、世界の一方で一部の作物の過剰を生み出しながら、また他方でますます多くの地域において、深刻な食糧不足を招いている。

食糧輸出国では、輸出競争で勝利を得るため価格引き下げを迫られた農民が、莫大な資本投下を強要され、過大な負債に苦しめられ、倒産・離農に追いこまれている。食糧の輸出入、いずれの国でも生き残った農業は、一層の効率化を迫られ商品作物への特化、あるいはいきすぎた大規模化のため農業・化学肥料・エネルギーの多消費を招き、生態系の破壊を生みだしている。

他方では、外に対してはアメリカのマーケット・ローンに典型的にみられるような低価格政策によって農産物の「ダンピング輸出」が行われているが、それは多国籍アグリビジネスを富ませるのみで、アジア・アフリカ・南北アメリカ・ヨーロッパの農民を苦しめ、自給的食糧生産を危機に陥れている。

急速な工業化を果たした、あるいは果たしつつある日本やアジアNIEESでは、巨大企業グループの利益を優先する工業優先政策と割安な外国産食糧の輸入にはさまれ、農業と農民は非効率な存在として切り捨てられ、食糧自給率は著しく低下している。コメ輸出にたよる発展途上国では、国内における工業偏重政策とアメリカを中心とする低米価政策によって苦しめられている。

多くの発展途上国では、自国工業の欠如と食糧生産の喪失という二重の苦しみを被っている。これらの国々は、飢餓によって悲惨な状況にあるばかりでなく、先進国からの食糧援助の受け入れを通して、いっそう主体性を失いつつある。

本シンポジウムで私たちが確認したことは、右にのべたとおり、立場や状況をこえて世界のどの国でも農民は窮地に立たされているということである。それがひいては食糧生産の安定性や安全性を損ない、消費者にも不安を与えている。

このような認識に立って、私たちは以下のことを提案する。

一、人間の存在の根幹にかかわる食糧の供給を少数の国が支配することは望まし

くない。各国・各地域における生態環境に適合した食糧自立が重要である。それに基づいた多様性が各国・各地域の自立性のみならず、地球全体の安定性を保証すると考える。

二、農産物貿易は、基本的に輸入する側の必要性に応じて行われるべきである。一部の農産物過剰国は、その調整にあたり、他国の農業の破壊を伴うような輸出を慎むべきである。そして、利潤一辺倒に傾くことのないよう、家族農業を根幹とする農業・食糧体制を確立すべきである。

三、一部の国々の大幅な貿易黒字は、ごく少数の巨大企業を中心に引き起こされたものである。過度な工業化と国際収支のインバランスを解決するには、農産物の輸入によるのではなく、工業生産と工業製品の輸出における適正レベル・農工間の所得バランスなどを模索することによって解決すべきである。

四、環境調和型農法として、自然農法・有機農業・減農薬運動など様々なものが試みられている。環境調和型農法を実現する一つの有効な経営形態は、環境の多様性にきめこまかに対応しうる小規模複合経営である。また、このような農法と経営形態を保証する流通形式の一つに食糧生産者と消費者との間の直接的な提携関係がある。それは、双方における経済的安定をもたらし、同時に両者の間の人間関係を親しくする点で有効である。食糧自立を保証するために個人・グループがとる主体的手段として、上の農法・経営形態、流通形態は十分試みる価値がある。

五、食糧は単なる栄養源にはとどまらない。食糧をそだて収穫する労働の過程で育まれた儀礼や相互扶助などの社会的協同性を通して、各国・各地域の人々は自己の文化的アイデンティティの基礎を築いてきた。食糧生産を中心とした祭りや、各国・各地域に伝わる独自の料理法や食生活体系を再評価し、発展させることが大切である。

六、以上の方向に向かって、私たちは、自由貿易原理を超える新しい国際経済の枠組みを樹立するために、農民・市民の立場に立った国際的ネットワークを形成し、広く政府や国際機関にはたらきかけることを呼びかける。

一九八八年八月二十七日

東京

「コメ輸入問題を手がかりにして食糧自立を考える国際シンポジウム」

格差に関する報告書2016 *oxfam*

「最も豊かな1%のための経済」

世界で最も裕福な62人が保有する資産は、世界の貧しい半分(36億人)が所有する総資産に匹敵

この数字が、わずか5年前2010年には388人だったことが事態の深刻さを示している。

- * 2015年には、世界人口の貧しい半分の総資産額は、2010年と比較して1兆ドル、41%減少。
世界の資産保有額上位62人の資産は、2010年以降の5年間で44%増加し、1.76兆ドルに達した。
(http://oxfam.jp/news/cat/press/post_666.html)

・世界の富裕層・多国籍企業は、社会が機能するための納税義務を果たしていない。世界の大手企業211社のうち188社が少なくとも一つのタックスヘイブンに登録している (その口座の個人資産額、推定約7.6兆ドル)

210 OXFAM BRIEFING PAPER

18 JANUARY 2016



Tondo slum in Manila, Philippines, 2014. Photo: Dewald Brand, Miran for Oxfam

AN ECONOMY FOR THE 1%

How privilege and power in the economy drive extreme inequality and how this can be stopped